

ある講釈師

昔から、多くの庶民信仰を集め、浅草の観音様として全国に知られている浅草寺。人々は生活の中で悲喜こもごもの出来事に出会う度に足を運ぶ。そして、健康を、幸せを祈る。1月18日。縁日の境内はにぎやかだ。観音堂では天下泰平を、諸願成就を祈る温座陀羅尼会が開かれている。

「南無觀世音菩薩」として祈る人々の胸にどんな悲しみがどんな願いがあるのだろうか。

境内の片隅では、1人の老人が素人講談が開かれている。観音堂が戦争で焼け、昭和33年改築落成以来、毎月18日の縁日には開かれているという。浅草を語り、浅草寺を語り、そして今の世の中を語る辻講釈師、稻葉さん。浅草は東京都の中で唯一の江戸っ子の町だという。境内は庶民の生活を表わすとも語る。忘れられたように、ひっそりと立つ平和観音像。その側で砂遊びやスケート遊びをする子供達。職もなく寝そべる老人や日向ぼっこをする老人。観光地としての浅草を訪れ、シャッターを切る外人。一見平和そうに見えるそれぞれの姿に生き抜く庶民の苦しみがある。

辻講釈師、稻葉さんは毎日、浅草寺を訪れてそれを感じるという。信仰から生まれた浅草。庶民性だけと片付けてしまうのはきっと軽率な事に違いない。

早大が日本一

—ラグビー日本選手権—

1月15日の東京・秩父宮ラグビー場。社会人優勝の新日鉄釜石対学生の雄、早稲田大学。この日両チームはラグビー日本一をかけて激突した。

試合開始3分、青と白のしま模様の新日鉄釜石は細川直がゴール前に突進、ゴロのリターンパスを伊藤正が好捕して、そのまま左中間に飛び込み先制点をあげた。これに対し早稲田は8分新日鉄のキックを津留崎が受けて平岡にパス、そして平岡・堀口の見事なパスワークで右中間にトライ（ゴール）して逆点、40分ハーフの前半は両者相手づらぬ三転、四転の好ゲーム、2万を越す超満員のスタンドは熱狂する観衆でわいた。

だが、この試合を静かに見つめる一人の男がいた。小林重雄、23歳。早稲田大学教育学部、体育学科3年。仲間は彼をシゲと呼び、16人目のラガーという。おととしの12月1日、FWの彼はスクランム練習中に頭を地面にたたきつけ、首の骨を折った。以来彼の175cmの体からすべての力が消えさってしまった。

妹の和枝さんは学校をやめた。ラグビーについては何も知らなかった彼女が、今ではルールもすべて覚えたという。早稲田は勝った。選手達はよろこびに泣いた。あのいまわしい事故さえなければ、彼も一緒に肩を抱きあって泣いたかもしれない。

まだ、感激のさめぬ翌日、早稲田フィフテーンは病床のシゲを見舞った。

シゲは不自由な体で、精一杯のよろこびを示した。